

「昭南島」における漫画家松下紀久雄

―「文化人」の南方認識の一事例―

松岡昌和

戦争と漫画の不可分理念は、大東亜戦争下に於ける枢軸、反枢軸を問はず、各国の宣伝活動の中に重要な存在として、対外的にも思想的宣伝謀略に最高度な活動を見ることが出来る。(中略)

大東亜戦争の真意義を理解させる方法として取り上げられた政治漫画は、原住民の中へ解り易く親しまれてゐたのである。娯楽的内容を具備した連載漫画、生活漫画、少国民漫画もその政治的、建設的内容を備へて、戦後著しく不足された娯楽面に明朗な賜物であつたのだ。

これを総括して報道宣伝漫画と唱へる事が出来ると思ふ。従来の一般的漫画感として抱かれてゐたはずらなるナンセンスや諷刺画ではなく、戦争遂行上欠く

べからざる存在であり、対内的には国民思想、戦力増強の多角的な要素を備へて新しい認識となつて現れたのであつた。(松下紀久雄『南を見てくれ』二〇二、二〇三頁)

一. はじめに

一九四二年二月から一九四五年九月まで、シンガポールは日本陸軍による統治下にあつた。この期間、日本軍は新聞、ラジオ放送、プロパガンダ映画などによつて現地住民の教化を試みた。そうした占領地における文化政策を担つたのが、日本陸軍に従軍してゐた「文化人」たちであつた。作家、詩人、画家、映画人、音楽家などさまざまな領域の

「昭南島」における漫画家松下紀久雄（松岡）

「文化人」が陸軍によって徴用され、占領地に送り込まれた。そうした中に、漫画家もいた。冒頭の引用は、そうした漫画家の一人でシンガポールにおいて従軍した松下紀久雄が日本内地で出版した画集『南を見てくれ』の最後の部分に当たる。「報道漫画について（序と編集後記にかへて）」の一節である。ここで述べられているような報道宣伝漫画とは一体どのようなものであったのか。漫画家は一体何を描いたのか。それは「思想的宣伝謀略に最高度な活動」を見いだせるものであったのか。本稿は、「従軍文化人」としてシンガポールを中心に活動していた漫画家であり、『南を見てくれ』の著者でもある松下紀久雄の徴用中の活動に焦点を当て、「南方文化工作」とも呼ぶべき日本の南方占領地における文化政策およびプロパガンダの一端を明らかにすることを目的とする。そして、そこから日本占領下シンガポールにおける文化政策の特徴と「南方文化工作」の限界を指摘したい。

松下紀久雄について、戦時中の活動はこれまでほとんど明らかにされてこなかった。画集『南を見てくれ』についても、日本の南方軍政に関する研究では取り上げられることがなく、松下の「従軍文化人」としての活動は歴史の闇に埋もれていたと言ってもいいだろう。日本内地で出版された『南を見てくれ』を取り上げた貴重な文献として、櫻

本富雄「一九九七」による『戦時下の古本探訪…こんな本があった』が挙げられる。櫻本は「文化人」の戦争責任を追求する立場から文学、映画、音楽、報道、広告、漫画など多岐にわたって史料を収集し著作にまとめている。本書もそのような櫻本の仕事の一環として著されたものであり、入手が困難となった戦時下の書物を恣意的に選択して内容を紹介したものである。『南を見てくれ』はその中の一章として取り上げられている。後述のように、『南を見てくれ』は松下が当時「昭南島」と呼ばれたシンガポール、スマトラ、ボルネオで見聞したことをイラストレーションと文章で解説したものであるが、櫻本の紹介はシンガポールに終始しており、スマトラやボルネオについてはほとんど言及していない。また、シンガポールについても、劇場と映画について特に多くのページを割いて紹介しており、画集全体の内容に関して十分に記述されているとはいえない。さらに、松下のシンガポールでの活動については触れられておらず、あくまで画集の一部のみに基づいた記述となっている。

櫻本「二〇〇〇」はまた戦争協力をした漫画家とその作品について紹介した『戦争とマンガ』も著している。同書では横山隆一、小野佐世男、田河水泡といった著名な人物のほか、戦時期の諸漫画家集団に名を連ねていた漫画家や、

さまざまな媒体に掲載された漫画を紹介している。松下の名は、さまざまな漫画家集団について記述した箇所で見及されているが、彼の作品の内容について著者はここで記述していない。同書では、「従軍文化人」として南方占領地に派遣された漫画家について言及しているものの、横山隆一と小野佐世男がジャワで現地日本軍兵士向けに陣中新聞『うなばら』で発表した作品を取り上げている程度であり、南方占領地における日本人漫画家の現地人向け作品については触れられていない。これは著者が主として日本国内で入手可能な日本語資料を収集・分析対象としているためと考えられる。

日本占領下シンガポールで活動した挿絵画家・漫画家については浦田義和「二〇〇七」による研究が取り上げられている。浦田は同地で刊行されていた英字紙 *Syonan Times* に見られるイラストレーションを扱い、特に多くの作品を寄せた洋画家の栗原信、本稿でも取り上げる松下紀久雄、吉野弓亮を取り上げている。それまでほとんど取り上げられてこなかったシンガポールにおける漫画家の活動の一端を明らかにした点で貴重な研究である。浦田は、「栗原のスケッチは、画家としての視線が感じられ」、「『ヨシノ』及び松下紀久雄の風刺漫画は政治的メッセージが強く、『ヨシノ』の表現は露骨で、松下紀久雄の表現は懐柔的である」

とまとめている。この論考は調査対象が *Syonan Times* に限定されている上、考察が印象論に陥っているきらいがあるため、さらなる検討の余地があるだろう。

南方占領地における「文化人」についての研究のほとんどが文学者に焦点が当てられてきており、漫画家を取り上げたものは決して多いとは言えない。そうした中で漫画家の作家性や作家個人の戦争および占領地への向き合い方などに視点が及んでいる研究も現れてきている。ジャワ島で従軍した漫画家／画家小野佐世男については、画集『ジャワ従軍画譜』が復刻されたほか「小野・木村編二〇一二」、小野耕世「二〇〇三・二〇〇四・二〇〇五・二〇一〇」および木村一信「二〇〇四」がジャワにおける活動について明らかにしている。また、フィリピンについてはカール・イアン・ウィ・チェン・チュア [Cheng Chua 2005] が日本人漫画家島田啓三のほか現地人漫画家の活動について論じている。さらに、マラヤについては、リム・チェンジュ [Lim 2009] がペナンで「親日的」作品を描いた現地人漫画家について紹介している。

本稿では、これらの先行研究を踏まえつつ、日本占領下シンガポールで刊行された華字紙『昭南日報』のほか英字紙 *Syonan Times* ならに松下が内地で出版した画集『南を見てくれ』を用い、それぞれの媒体に発表した作品を取

「昭南島」における漫画家松下紀久雄（松岡）

り上げ、対照させたい。本稿では漫画家と漫画作品を扱うものの、芸術的な作品分析には立ち入らない。これは歴史学ないし歴史社会学の立場からこうした対象を見た場合に、その関心が芸術学と異なるという点が大きい。ここでは南方占領地で行われた文化政策やプロパガンダがどのようなものであったのかを明らかにするという関心のもと、描かれた対象を検討し、作家の南方観について考察する。そしてそれを文化政策やプロパガンダというより大きなコンテキストの中に位置づけて、「南方文化工作」の理念や政策との差異を浮き彫りにしていきたい。

二、「従軍文化人」と漫画家松下紀久雄

松下の具体的な作品を見ていく前に、戦時期に南方占領地に派遣された「従軍文化人」と松下の経歴について簡単に紹介しておきたい。アジア太平洋戦争では多くの作家や「文化人」が徴用され、陸海軍に勤務した。彼ら「文化人」の徴用は一九三九年七月に施行された国民徴用令に基づくもので、一九四一年一〇月以降文学者をはじめ画家、漫画家、映画人、演劇人、放送関係、新聞記者、印刷関係、宗教科関係など多数が徴用令を受けた。徴用された「文化人」

は文学者だけで七〇人以上にのぼると考えられており、徴用期間は一樣ではなかった「神谷一九九六・六・九」。ただ、通常その任期は一年であったようである「中野二〇一二・四」。かれらはどこに行くのかもわからないまま徴用令書の指示に従う形で出頭し、有無を言わず未知の職場へと徴用されていったのである「中野二〇一二・四・六」。

マラヤ・シンガポールに徴用された「文化人」としては松下のほか、作家では会田毅、小出英男、神保光太郎、村地平、寺崎浩、井伏鱒二、中島健蔵、小栗虫太郎、秋永芳郎、大林清、北川冬彦、里村欣三（後にボルネオに異動）、海音寺潮五郎ら、画家では栗原信ら、ジャーナリストでは堺誠一郎、山本実彦、前田雄二、平井常次郎、平野直美、柳重徳ら、カメラマンでは石井幸之助ら、音楽家では長屋操ら³がいた「中島一九七七・一二・一三・七一・七四」。また、漫画家の倉金良行がシンガポールで従軍していたほか、画家の藤田嗣治が従軍画家としてシンガポールを訪問している。そのほか、映画監督の小津安二郎も陸軍報道部映画班員としてシンガポールを訪れ、インド独立運動をテーマとした記録映画を撮ることとなった「西原二〇〇二」。井伏によれば、彼と同じ輸送船に乗り込んだ徴用部隊は総勢二二〇人とあるが、正確な人数は不明である「井伏一九七四・七」。彼ら「文化人」たちが所属した

宣伝班（一九四二年一二月に宣伝部に昇格）の任務は①占領地の住民に対する宣伝宣撫、②対国内報道、③作戦軍將兵の啓蒙であった「松永二〇〇二・五八」。

こうしてシンガポールに渡ってプロパガンダに携わることになった松下紀久雄とは一体いかなる人物なのであるか。一九一八年東京に生まれた松下の戦前の活動についての情報は極めて乏しい。櫻本富雄「二〇〇〇・一二・五二」によれば、松下は近衛内閣の新体制運動に呼応して結成された漫画家集団である「新日本漫画家協会」傘下の「漫画協団」に所属していたが、後に加藤悦郎が一九四一年に結成した「建設漫画会」に参加した。「建設漫画会」は国策協力をもっと強力に推進することを目的としていた集団であった。筆者が確認できた松下の漫画家としての最も古い活動は、情報局発行のグラフィック雑誌『写真週報』一七五号（一九四一年七月二日）および一八一号（一九四一年八月一三日）に掲載された四コマのイラストレーションである。これについては櫻本「一九九七・七九・八〇」も言及している。ここでの肩書きは「中支 坂部部隊」となっており、彼が中国戦線に赴いていたことがわかる。『南を見てくれ』での記述によれば、彼は兵士として中国に赴いていたようである。「松下一九四四・一四五」。彼は雑誌『軍人援護』の一九四一年一〇月号から一二月号にかけてそれぞれ「帰

還兵の見た戦地と銃後」、「再起鉄脚二人組」、「土の増産を聞く」と題された文とイラストレーションを発表しており、また「帰還兵の見た戦地と銃後」では自身が中国から帰還したことが語られていることから、一九四一年秋までには日本内地に戻っていたと考えられる。

南方に派遣された松下はシンガポールにおいて宣伝班の美術部に所属したのち、ボルネオに転属している「松下一九四四・一六四」。松下がいつシンガポールに渡ったかは確認できていない。松下はシンガポールにおいては一九四二年五月以降新聞紙上に漫画を描いており、この時にはすでにシンガポールで任に就いていたと考えられる。また、松下自身の記述によれば、スマトラへの取材の後、シンガポールで新聞に漫画を掲載した後にボルネオに転属になったとあることから、『昭南日報』に後述する「明朗なスマトラ新生譜」を連載した一九四二年一〇月の直前にスマトラ渡航をしており、その後にはボルネオに渡ったと推測される。松下「一九八九・四二」の回想によれば、彼はスマトラで敗戦を迎え、集結地であるメダンを經由してシンガポールの収容所へと送られた。『南を見てくれ』の奥付には一九四四年八月発行とあるが、必ずしも日本内地ではなく、南方の任地で書かれた可能性が高い。ただ、一九四三年から四五年にかけての任地での松下の活動につ

「昭南島」における漫画家松下紀久雄（松岡）

いては情報が極めて乏しい。

シンガポールにおいて松下は華字紙『昭南日報』および英字紙 *Syonan Times* に漫画やイラストレーションを描いている。それぞれの紙面における松下の作品については次節で詳細に見ていくが、ここでは彼が活動の舞台とした日本占領下シンガポールにおける新聞事情について簡単にしておきたい。日本占領下シンガポールでは、日本語新聞、英字紙のほか、華字紙、マレー語紙、タミル語紙など、各民族語による新聞が刊行されていた。これら新聞は *Shoits Times* 社など、戦前に営業していた新聞社を接収して、職員も戦前から勤めていた現地人スタッフを雇い用し刊行されたものである。「井伏 一九四三 b」一九四七年二月一八日に、「文化人」が軍命令によって各新聞の編集責任者として割り当てられた。その後、日本陸軍は一九四二年一〇月に南方占領地域で新聞を指導するよう報道各社に命令を出し、シンガポールは同盟通信社と中央・地方紙一三紙が担当することになった。「里見二〇〇〇・一六三・一六六」。これによって、シンガポールでは昭南新聞会が設立され、*Syonan Times* と *Syonan Shimbun* と改称した。

『富軍政年報』によると、一九四三年一月当時シンガポールで発行された主な新聞と一ヶ月あたりの発行部数は以下の通りである。「明石編一九九八・一二八・一三〇」。

昭南新聞（日本語）：三四万〇三四二部

Syonan Shimbun（英語）：二五万〇〇一四部

Utusan Melayu, Warta Melayu（マレー語）：一〇万六三四〇部

昭南日報（華語）：三〇万九七九〇部

子供新聞サクラ（カナ文字）：二万一〇〇〇部（一九四二年一〇月）

さて、話を松下の経歴に戻そう。スマトラで敗戦を迎えた松下であるが、戦後は一九四七年より漫画家・画家としての活動を再開したことが確認されている。一九五二年に開始した朝日新聞の連載「東京むかしむかし」のほか、こども向けの作品や書籍のイラストレーションを多く残している。そのほか、日曜大工のTV番組にも出演するなど、多岐にわたる活動を行った。特に、先史時代から同時代までの無名の庶民たちを描く「むかし絵」を得意としていた。「松下一九八九・九」。

三、松下紀久雄の描いた南方

1. 画集『南を見てくれ』

松下のシンガポールにおける活動に先立ち、彼が南方を記録した集大成とも言える画集『南を見てくれ』の内容を見ていきたい。同画集から、シンガポール滞在時の彼の行動と東南アジア地域に対する彼の認識についてうかがいすることができる。

二〇四ページから成る同画集は大きく四章立てとなっている。最初の三章はそれぞれ「昭南島」、「スマトラ」、「ボ



図1. 松下紀久雄『南を見てくれ』表紙

ルネオ」と題され、松下がそれぞれの土地で経験したことが合計六九のエピソードから成っている。それぞれのエピソードには内容に関係したり、その土地で印象的と思われるイラストレーションが付されている。第四章は「報道漫画について」と題されており、序と編集後記を兼ねたものである。本稿冒頭に引用した一節はこの一部に当たるものであり、戦時期における漫画を用いたプロパガンダの意義や本画集の出版目的が語られている。表一は「昭南島」、「スマトラ」、「ボルネオ」それぞれの章のエピソードの標題を示したものである。まず指摘されるべきはスマトラに関するエピソード数の多さである。ページ数をカウントしても、「昭南島」および「ボルネオ」がそれぞれ五〇ページであるのに対して、「スマトラ」にはその二倍の一〇〇ページ強を割いている。イラストレーションについても全一二三点のうち、五三点がスマトラを描いたものである。松下自身の任地であったシンガポールとボルネオよりもスマトラに重点が置かれているのは極めて特徴的である。ただそれが軍宣伝班員としてスマトラについて多くの記述をする必要があったためか、あるいは松下自身がスマトラに強い関心を持っていたためか、それともその両方であったのかについてはわからない。

また、取り上げているエピソードにも特徴が現れている。

同画集は「報道政治漫画」を謳っているものの、政治的・軍事的な内容を中心に据えたエピソードは決して多くない。むしろ、松下自身が見聞したそれぞれの地域の印象的な場面が描かれながら各地の様子が紹介されていく紀行文さながらの内容である。「昭南島」では宣伝班員としての日常生活の描写や、現地の風景を面白おかしく紹介したものとなどが中心である。「バタの臭みから味噌汁の味へ」と題されたエピソードは、標題こそ「西洋的文化から脱して日本化していく昭南島」といった記述を予想させるが、「日本化」については街中で日本語が使われるようになったということが多少触れられる程度で、記述の多くは洋車（人力車）の車夫とのやりとりについて割かれている。

最も多くの紙幅が割かれている「スマトラ」では都市化されていないスマトラの珍しい光景や風習、人々の生活の有り様などが記述の多くを占めている。ここでもやはり「日本語進駐」といった、極めて強い政治的宣伝を彷彿とさせる標題のもとで、松下の個人的な体験が語られる。この項目の中心を占めるのは、現地社会の「日本化」というよりも、バタック族がムスリムの多いインドネシアでは珍しくキリスト教徒であるために豚を食用とするという、標題とは無関係のエピソードである。また、「スマトラ」の章の最後に収められた「北部スマトラ雑報」、「スマトラの握り

鮭」、「スマトラ羊羹」、「薪の気車」の四エピソードは、本章の解題とも言えるようなものであるが、そこに記されているのは、標題にもあるように、スマトラのメダンで鮭や羊羹を調理して食べたという個人的な体験談である。

「ボルネオ」で目立つのは村落を描いたイラストレーションである。この章は一一のエピソードと三九のイラストレーションから成っている。イラストレーションのうち半数以上はマレー人や先住民の村落を描いており、その中でも松下が被写体として多く取り上げているのが上半身裸体の女性の姿である。そうしたイラストレーションの数は六点上る。「昭南島」や「スマトラ」の章では全く描かれなかった被写体であるが、「ボルネオ」で複数登場するのは特徴的である。

本画集全体に描かれたイラストレーションの特徴として、日本人の描写の少なさが挙げられる。「昭南島」、「スマトラ」、「ボルネオ」を描いた全一二三点のイラストレーションのうち、服装などから日本人であると判別可能な人物が描かれていたイラストレーションは七点に過ぎない。本画集には全体に日本軍による「大東亜建設」の要素は散りばめられているものの、そのイラストレーションからは現地住民の姿、特にこどもと女性の姿を多く見ることができ。また、そうした現地住民の姿は「日本化」した様子

表1. 『南を見てくれ』のエピソード一覧

史苑
(第七五卷
第二号)

昭南島	スマトラ	ボルネオ
昭南島の日本語学校	スマトラ画信	ボルネオの一夜
神保学校〔建〕	南洋の中央市場 セントラル・パサル〔新〕	サラワツクの歴史
特別市立中央病院	さア、コロンチョンを踊らう	久鎮の町
マライの増産	街頭の果実店	サラワツク川
チャーチル市場	メダン風俗	イカンタマコン
ユビーとケダモノ	バナナ屋は何処だ	樹間のコーヒー店
昭南神社	子供の風俗	ボルネオの子供
新世界	シンパンバレツク温泉	農民指導
バタの臭みから味噌汁の味へ	スマトラはジャングルではない	兵隊さんの先生
新聞売り	昼は断食、夜は食宴の回教徒	クチンウキスキー
南進通りオーチャード・ロード	アチエは独立すると云つて居る	海ダイヤ族
印度人の番人	轟夕起子はオランダ人だ	
昭南島の劇場	コーヒー紅茶の氾濫!	
昭南島人種展	食ふか、食はれないか	
華僑の街	ガヨ族のアパート生活〔日〕	
税金納入済	バンクが一日に六回	
華僑の子供	郷に入れば	
	日本語進駐〔新〕	
	寒いところもあるスマトラ	
	自動車と現住民	
	私は紙芝居屋さんではない	
	牛のカバラ(頭)とタイプ音〔新*〕	
	写真一枚撮られ料十銭也	
	スマトラの子供〔新〕	
	新生スマトラの歩み	
	三銭のコーヒーと一円の定食	
	砂糖より高い塩が出来る〔新〕	
	スマトラは牛が多すぎる	
	ガタバス繁盛	
	鶏が一羽二十五銭也	
	ニツパヤシの屋根で床の高い日本の家	
	裕福な町パダン	
	北部スマトラ雑報	
	スマトラの握り鮨	
	スマトラ羊羹	
	薪の気車	

〔建〕:Syonan Times における「昭南島建設」に関するイラストレーションの再録

〔新〕:『昭南日報』における連載「明朗なスマトラ新生譜」のイラストレーションの再録

〔日〕:『昭南日報』における連載以外のイラストレーションの再録

* 描いた対象は同じだが改変がなされている。

「昭南島」における漫画家松下紀久雄（松岡）

ではなく、松下自身が興味を惹かれたであろう、日本とは異なる現地独特の風習であったり生活様式であったりする。

しかし、松下がどこまで現地の風習に理解を示していたかについては疑問が残る。例えば、スマトラに赴く際、マレー系の新聞社社員を同行させているが、松下を含めた取材班一行は彼の傍らで、しかも彼が嫌な顔をしていることを認識しながらも、豚肉を食べている。現地宗教への無理解は一人松下に限ったことではないだろうが、それでも松下の現地文化理解には限界があったと言わざるをえない。

総じて、『南を見てくれ』に描かれたものは、松下自身が南方での任務の中で体験したことや受けた印象を、あくまで松下の主観で記述し描いたものである考えられる。以下では松下がシンガポールで任にあたっていた時に現地の華字紙『昭南日報』および英字紙 *Syonan Times* に寄せた作品について見ていきたい。

2. 『昭南日報』における連載とイラストレーション

① 昭南島建設譜

松下は『昭南日報』に二本の連載とその他の多数のイラストレーションを残している。その一つは「昭南島建設譜」と題された連載で、一九四二年五月二二日から同年六月九

日にかけて、一五回にわたって紙面に登場する。取り上げられているのは、さまざまな子どもが日本語を学ぶ昭南児童園、混雑する市内交通を処理する交通警察、日本軍によって再開され現地住民に喜びを提供する娯楽、繁盛する商店、日本化していく現地の食堂、印刷所でのピラの印刷、日本の金融機関の現地での営業開始、ライフラインの整備、病院に勤務する看護師、新聞社で日本語を使って働く現地職員、日本語普及と娯楽提供を行う昭南放送局、飲食店で



図2. 『昭南日報』1942年6月7日

「昭南島」における漫画家松下紀久雄（松岡）

の姿が「明朗なスマトラ新生譜」には一切描かれていない。描かれているのは現地の住民とその暮らしぶりである。松下が北スマトラにおける「建設」よりも現地の風俗により多くの関心を寄せていたことは、これらのイラストレーションが再録された『南を見てくれ』の記述によく現れている。「スマトラはジャングルではない」「松下 一九四四・七三」と述べながらも、いかに珍しい文物を見たか、いかに珍しい暮らしぶりに触れたか、いかに珍しい体験をしたかといったことが強調されている。日本軍が進駐して日本語学習が進み、「新生スマトラ」の「発展」が目覚ましいとしながらも、松下の関心はエキゾチックなトロピカルフルーツや呑気で無邪気な現地住民の姿なのである。松下の描くスマトラ住民は、一九三〇年代の日本内地における描写に見られるような「サンボ・タイプ」ではなく、より写実的なものへと変わっている。しかし、その性格はのんびりしていて人懐っこい「土人」イメージで描かれており、「南方」に対する通俗的理解、つまり川村湊「一九九三」が言うところの「大衆オリエンタリズム」が反映されていると言える。彼らは、松下にとってあくまで好奇の対象としての他者でしかなく、そこには、共存していく上での葛藤がほとんど描かれていない。彼らは、日本軍の支配領域の住民ではあるものの、日本人が共存していく「内なる他者」

ですらなかったのである。

③その他

上述の二つの連載のほか、松下は多くのイラストレーションを『昭南日報』に提供している。これらは大きく、



図 4. 『昭南日報』 1942 年 5 月 2 日

現地における「建設」に関するもの（二点）、英米中との戦いに関するもの（四点）、一九四二年六月に開催された「昭南島婦人之建設座談会」を紹介した記事のイラストレーション（八点）に分けられる。

まず、現地における「建設」に関するものとして、一九四二年五月二日には天長節を祝う演劇の準備に勤む華人の劇団の舞台裏を描き（図4）、一九四二年一〇月四日にはスマトラのカンボン・タケゴンにおける集合住宅を描いている。描いている対象などから、前者は「昭南島新生譜」に連なるものとして、後者は「明朗なスマトラ新生譜」に連なるものとして位置づけることが可能である。なお、後者は「明朗なスマトラ新生譜」のイラストレーションと同様に、『南を見てくれ』に再録されている。

第二に、英米中との戦いに関するイラストレーションは一九四二年四月から同年七月にかけて一月に一点ずつ現れる。一九四二年四月一八日には、イギリスが海岸でマラヤから追い出され、海中で溺れている様子が描かれている。イギリスは、日本の他の多くのイラストレーションと異なり、当時の首相チャーチルの姿ではなく、ただの男性として描かれ、抱えている荷物に見えるユニオン・ジャックからイギリス人であることが明らかとなっている。イギリスをマラヤから追い出しているのは、日本であり、陸地から



作權久紀下松 | 有來起作權 | 其有以英之國之取就於真奔巴甲戰輸權
——員新領領軍島島現・村逸之界畫漫本日・氏下松者繪——

イギリスを押し出す巨大な腕として描かれている。この腕には日の丸が描かれており、日本であることが示されている。その腕の両脇には、マラヤの主要なエスニック・グループである華人、マレー系、インド系がそれぞれ、特徴的な

図5. 『昭南日報』1942年5月19日

「昭南島」における漫画家松下紀久雄（松岡）

衣装を身に着けた男性として描かれている。

一九四二年五月一九日には、英米が敗戦を繰り返す様子が、巨大な船に模された地図の一部（ビルマなど）が破れていく様子として描かれている（図5）。それとともに、イギリス首相チャーチル、アメリカ合衆国大統領ローズヴェルト、中華民国総統蒋介石が焦りながら熱弁を奮っている様子が描かれている。ここで興味を引くのが蒋介石の描かれ方である。蒋介石は他の二人に比べて小さい姿である。一九四二年六月一九日には、「英国の野望は水の泡となった」と題されて、独立に向けて放棄したインドとビルマがそれぞれの独立旗を掲げて蜂起している上をチャーチルが蒋介石を背負いながら綱渡りしている様子が描かれている（イラストラレーションの左側には「印度独立」と書かれた煙がのぼっている）。そして、チャーチルがふらつきながら渡っている綱にはハサミがかけられており、イギリスのアジア支配が終わりを告げることが想起されている。一九四二年七月二日には、「断末魔のイギリス」と題されて、それぞれ戦車として描かれたイタリアとドイツが、チャーチルを追い詰める様子が描かれている。追い詰められたチャーチルは木によじ登ってしがみついているが、それは大きくしなっており、チャーチルの置かれた状況の「危険さ」が伝わっている。

第三に、「昭南島婦人之建設座談会」を紹介した記事のイラストラレーションでは、出席者の似顔絵四点のほか、現地の女性に対する「建設」運動協力を呼びかける様子が描かれている。一九四二年六月一九日には、「建設」と記されたジョウロで花に水を撒く女性が、同年六月二〇日には、もんぺ姿で両手にバケツを持ちながら子ども二人を引き連れた日本女性が、同年六月二二日には、「日本語」と記された本を掲げている女性の列が、同年六月二三日には、「婦人団体」と記された女性の像を制作している女性たちがそれぞれ描かれている。こうしたイラストラレーションを通じて、女性たちによる「建設」運動への積極的な協力と、そのための婦人団体の設立が呼びかけられている。

3. *Syonan Times* における連載とイラストラレーション ① 「ケンセツオヤチ Pah Long」

英字紙 *Syonan Times* における松下の創作は、一九四二にわたる連載漫画である「ケンセツオヤチ Pah Long」、「昭南島建設」に関するイラストラレーション五点、敵英米中に関するイラストラレーション四点に大きく分けられる。

一九四二年六月に一九回にわたって連載された四コマ漫画「ケンセツオヤチ Pah Long」は、華人男性を主人公とした漫画であり、「昭南島」の「建設」を謳ったプロパ



図 6. Syonan Times, 1942 年 6 月 5 日

ガンダ作品である。その内容として取り上げられているトピックは、日本語学習、社会改良、防空体制、食糧増産などである。特に多く取り上げられているのは日本語学習(図 6)であり、挨拶の仕方を取り上げたものまで含めると一々本を数える。日本語の普及がプロパガンダの中心にあつたことを示している。社会改良を取り上げたものは三本であり、闇市批判、時差の変更(東京時間に合わせる)、整列乗車の呼びかけが描かれている。また、戦時期に特徴的なトピックとして、防空体制(二本)や食糧増産(二本)が挙げられる。これら戦時期特有のトピックは、漫画以外

の記事や、他のメディアにおいても強調されていたことであるが、これらを徹底させるための要請が松下の創作活動にも及んでいたことをうかがわせる。

主人公 Pah Long は、彼が華人であるとは明示されていないが、細く尖ったあごひげ、辮髪を連想させるアンテナのような髪型から、華人であることが連想される。このイメージは、中国服・中国帽・泥鰌髭などに象徴されるようなフー・マンチューのイメージとは異なったものであるが、その前時代的な髪型や極端な猫背など、その描き方はカリカチュア化されたものである。

「昭南島」における漫画家松下紀久雄（松岡）

この連載には、偶然通りがかった日本軍兵士一団を除いて、明らかに日本人とわかる人物の姿は描かれていない。あくまで主人公 Pan Long とその息子の主体的な日本語学習と社会改良が描かれている点が特徴的である。

② 「昭南島建設」に関するイラストレーション

『昭南日報』における連載「昭南島建設譜」に相当するものとして、松下は「昭南島建設」に関するイラストレーション五点を一九四二年五月から六月にかけて不定期に *Syonan Times* 紙上に描いている。そのうち、新聞社を描いたもの（五月三〇日）、日本語普及運動における劇場の様子を描いたもの（六月一日）、病院に勤務する看護師を描いたもの（六月二四日）の三点は、『昭南日報』における「昭南島建設譜」と同一であり、付された解説も類似している。『昭南日報』に掲載されていないものとしては、天長節を祝うショーを描いたもの（五月二日）（図7）、軍宣伝班による日本語学校を描いたもの（五月二二日）がある。後者は画集『南を見てくれ』にも再録されているイラストレーションであり、神保光太郎の昭南日本学園を描いたものであることがわかる。

これらのイラストレーションは「昭南島建設譜」と同じく、日本軍の統治のもとでの「大東亜建設」と現地社会の

「繁栄」、そして日本語の普及が強調されており、特に現地住民の主体的な日本語学習と「建設」への参加が中心となっている。

③ 敵英米中に関するイラストレーション

上記以外の作品として、松下は敵英米中に関するイラストレーションを四点 *Syonan Times* 紙上に描いている。一九四二年四月から同年七月にかけて掲載されたこれら



Syonan's open-air theatres are full of joyful people. Children are frequent visitors to these shows and they are usually accompanied by Nippon soldiers who love the company of children very much. That is why the children proudly throw out their chests for they are glad to be with the Nippon soldiers. It is such a transformation from the fire of war some two and a half months ago, for everybody is happy now.

図7. *Syonan Times*, 1942年5月2日

は、いずれも『昭南日報』などには見られないものである。四月一七日には、イギリス首相チャーチルとアメリカ合衆国大統領ローズヴェルトが「戦争」と書かれた炎を上げている炉にマラヤ、オーストラリア、フィリピンを投げ込もうとしており、そこからインドだけが逃げ出そうとしている様子が描かれている。このイラストレーションには「稚拙な労働者は、ある日彼自身をその溶鉱炉のなかに見出さざらう」という説明文が付されており、英米が「稚拙な労働者」であり、戦争によって滅亡する運命にあること、またそうした運命からインドは独立という形で脱しようとしていることが示唆されている。五月二八日には、チャーチルが演説で熱弁をふるっているが、足元は泥沼に浸かっている様子が描かれている。付された説明文には、チャーチルは連合軍が勝利を重ねていると述べているものの、実態はそれが嘘であるという旨が記されている。六月二日にはローズヴェルトが破壊された船や撃ち落とされた飛行機とともに脱力して海に浮かんでいる様子が描かれている。七月七日には、中華民国総統蒋介石が、手として描かれている英米によって、屍の山に放り出される様子が描かれている(図8)。説明文には「東アジアの永遠の平和の為に蒋介石は連合軍との同盟を考え直した方がよい」とあり、蒋介石が英米の傀儡となっていること、蒋介石率いる

重慶政府と日本は交渉の余地があることが示唆されている。

これらのイラストレーションでは、英米中とも、指導者の姿が国家を象徴するものとして描かれる一方、日本の姿が全く描かれていない点、また中国が英米よりも小さく、操られている存在として描かれている点が特徴的である。こうした中国の描き方は2③で見た『昭南日報』におけるイラストレーションと共通したものである。



図8. Syonan Times, 1942年7月7日

「昭南島」における漫画家松下紀久雄（松岡）

4. 従軍漫画家としての松下紀久雄

以上、松下の作品についてみてきたが、その特徴のまとめとして大きく三点述べておきたい。第一に、「建設」が松下の作品を貫くキーワードであるという点である。『昭南日報』における連載はいずれも「建設」を題目に含み、女性たちによる「建設座談会」の関連イラストレーション描き、また、『*Syonan Times*』においても「ケンセツオヤヂ」を主人公に据えた漫画を連載していた。スローガンとして「建設」を標榜することは『南を見てくれ』にも共通している。実際に描かれている対象や、説明されている内容にかかわらず、「建設」を謳うことは松下の従軍漫画家としての創作において一貫したテーマであったと言える。

第二に、日本人の姿が描かれたイラストレーションが極めて少数であるという点である。「建設」に関するイラストレーションにおいても、あくまで現地住民による積極的な「建設」が謳われており、それを指導する日本人が活字の上では現れていても、イラストレーションの上ではごく少数である。また、英米中との戦いに関するイラストレーションにおいても、人物として描かれるのは主として敵である英米中の指導者であり、それ以外はイギリスを撃退する場に立ち会っているマラヤ人の姿のみである。日本の姿は、イギリスをマラヤから撃退する腕としてのみ描かれ、

日本兵の姿は見られない。

第三に、「建設」が主要なテーマとして取り上げられながらも、松下の創作の主要な関心が現地で見聞した風俗や文物などであったという点である。「明朗なスマトラ新生譜」と題された連載のイラストレーションやそこに付された説明、あるいは『南を見てくれ』のイラストレーションおよびテキストからは、東南アジア各地で見聞し印象に残ったものが中心に述べられており、そこに現地住民の日本語学習や日本軍の協力のもとでの発展といった定型化された要素が付け加わったに過ぎないと考えられる。このように、「異国」の「エキゾティシズム」を求める傾向は「*Pah Long*」にも見られる。「*Pah Long*」は「昭南」という都市の華人の生活を描いたものであるが、そこで描かれている主人公はカリカチュア化された華人のイメージであり、「日本人」とは異なる、エキゾティシズムを示すものとして表象されていると見ることができると言える。

四. おわりに

以上、本稿で見てきた松下の活動から、簡単な考察を試みたい。第二次世界大戦中レジスタンスに参加したフランスの政治評論家ジャン＝マリー・ドムナック「一九五七：

四七」は図画によるプロパガンダの効果について次のように強調している。

図画——写真、漫画、諷刺画（寓意および象徴）、首領の肖像など、その種類はたくさんある。図画はたしかにもっとも人の目をひく、もっとも効果的な手段である。知覚するのに時を要せず、なんの苦勞もいらない。短い解説のついた図画はどんな文書や演説の代りをも立派につとめる。

漫画家松下紀久雄「一九四四・二〇二」も、冒頭の引用にあるようにプロパガンダ活動における図画・漫画の役割とその重要性を強調している。

確かに、活字メディアと比較したときに、漫画のような図像メディアがプロパガンダ活動で果たす役割は決して小さくはないであろう。しかし、本稿で見てきた日本占領下シンガポールの新聞に見られるイラストレーションに関して検討すると、その効果は絶対的な力を發揮するものではなく、その効果に大きな限界があったと指摘できる。ここでは、その要因について三点指摘したい。

第一に、プロパガンダの送り手と受け手の認識の大きなズレである。プロパガンダは「特定の観点を受け手に伝達することであり、その最終的な目的は、受け手がその立場があたかも自分自身のものであるかのように『自発的に』

受け入れるようにすること」であるが「プラトカニス&アロンソン一九九八：一〇」、「昭南島建設譜」に見られるイラストレーションは受け手の情報の受容性に配慮した内容とは言いがたい。日本占領下シンガポールでは、物流の機能不全、買い占めなどによって食糧をはじめとした物資が不足し、闇市場が横行するようになっていた。また日本軍が乱発した軍票によって金融は崩壊しており、多くの住民の日常生活は、松下が「昭南島建設譜」で描いたような「繁栄」とは程遠いものであった。

そうした状況において、住民たちは日本側による報道に対して信頼を寄せていなかった。住民は当時の報道が日本軍の宣伝に終始しているために、新聞に対する関心をほとんど持たなかった。「シンガポール・ヘリテージ・ソサエティ編二〇〇七・二一八」。つまり、新聞で紹介される内容は事実に基づくものではなく、日本軍に都合のいい形で歪曲された情報であることを住民は見透かしていた。プロパガンダの送り手は、結局のところ、住民の意思を把握しそれを操作する術を持ち得なかったのである。実際、イラストに描かれた内容は紋切り型の南方風情であったり、日本軍の支配のもとでの「繁栄」など事実と異なることが一目瞭然の内容であったり、一方的に日本軍の英米への敵愾心を表すものでしかなかった。松下自身の作品もまた、紋切り

型の南方風情や定型化された「共栄圏建設」でしかなかったと言える。

第二に挙げられるのが、松下のプロパガンダ活動への向き合い方である。彼はシンガポールあるいはその隣接地域で見たいものだけを見て、描きたいものだけを描いたにすぎないのではないだろうか。松下の作品は、戦争を取り上げたイラストレーションに英米中の指導者が登場するものの、多くは現地の風物を描いたものであり、日本人はほとんど描かれていない。彼は戦時プロパガンダという職責を抱えていたのだが、ありのままの現地社会と向き合っていたと言うよりも、彼なりの南方観を現地社会に投影して作品を描いたのではないだろうか。

第三に、松下の作品はプロパガンダの対象が不明瞭であることである。松下は、似たような作品、あるいは全く同じ作品を媒体に関係なく流用している。彼が「明朗なスマトラ新生譜」で描いたイラストレーションは、ほとんどが画集『南を見てくれ』に再録されている。彼は現地華人向けのイラストレーションと日本内地の読者に向けたイラストレーションを全く使い分けていないのである。このように、プロパガンダ作品は特定の対象に向けられて制作されたものではなく、それゆえ、期待されるプロパガンダの効果もはっきりしていなかったのではないかと考えられる。

戦時期の「文化人」や芸術家の活動については、その戦争責任を追求する立場から、国策協力的あるいは軍事的な作品がこれまで強調されることが多かった。松下もまた、戦争を現地紙上で描いている。しかし、むしろ一連の作品群の中で目立つのは彼の非政治的・非軍事的な作品である。確かに、非政治的であることは時として非常に政治的であり得る。ところが、これまでの研究で指摘されているのは、日本占領下シンガポールにおけるプロパガンダ政策の一貫性のなさであった。同地においては、明石陽至〔一九九七：二〇〇一；Akashi 1991; 2008〕が指摘しているように、軍政の実質的責任者であった渡邊渡のもとで、「皇民化」思想を徹底することを目的とした文教政策が実施され、学校教育においても日本語化を急速に進めようとする方針が打ち出された。しかし、そうした上からの方針は必ずしも実態に適合したものではなかった。プロパガンダの現場においても、「文化人」が遂行した実際の活動は、現地の状況を踏まえた高い計画性を持つものではなく、そこにいる「文化人」一人ひとりの個性と能力に大きく依存するものであった。実際に創られたプロパガンダ作品に現れるスローガンや精神性とは裏腹に、その効果は限定的で脆弱なものでしかなかったと言うことができよう。松下の一連の作品に描かれた南方占領地の姿は、強力な軍政の力

によって生み出されたものというよりも、彼の作家性が表面化したという側面が強い。それゆえ、戦時であるという特殊性を超えて、当時の一人の「文化人」の南方認識を伝えたものであるとみなすことができよう。

註

- (1) *Syonan Times* においては Yosino という署名しか付されていないため、浦田は「ヨシノ」と紹介しているのみであるが、筆者が華字紙『昭南日報』と対照させたところ、この Yosino が吉野弓亮であることが確認された。
- (2) 従軍作家については多くが日本文学の立場から研究が進められてきた。主な研究としては神谷忠孝および木村一信らによる一連の研究「神谷・木村編一九九六・二〇〇七・木村二〇〇四」などが挙げられる。また、従軍作家の作品については『南方軍政関係史料』のうち『南方徴用作家叢書』として復刻が進んでいる。歴史学の立場からは河西晃祐「二〇一二」がジャワで従軍した作家を取り上げているほか、中野聡「二〇一二」が南方占領地における作家たちの戦争経験について考察している。
- (3) 本名倉金虎雄。田河水泡に師事し、一九三〇年代より倉金良行の筆名で講談社の雑誌『少女倶楽部』を中心に漫画を連載していた。戦後は倉金章介の筆名で活動し、少女ギャグ漫画『あんみつ姫』で知られている。倉金の戦時中の活動については不明な点が多いが松岡昌和「二〇一二・二〇一三」がシンガポール滞在中の作品を紹介している。
- (4) ここでは「中支」とあるが、後に松下「一九八九・一九九」は兵隊時代の回想として、満洲黒竜江省の佳木斯での出来事を記しており、中国戦線でのような移動を行っていたのかは不明である。
- (5) その他、井伏鱒二「一九四三a」「一九七七a」も当時の新聞刊行状況について記している。
- (6) バタックはトスマトラ島北部を中心に居住するオースト

「昭南島」における漫画家松下紀久雄（松岡）

ロネシア語族の民族である。方言別にカロ、ダイリ、シマルンゲン、トバ、アンコラ、マンダイリンの六つのグループに分けられ、マンダイリン地区は多くがイスラムを受容した一方、その他のグループは一九世紀後半から活動を開始したプロテスタント宣教師に接近し、多くがキリスト教徒となった〔弘末二〇〇八・三三四・三三五〕。「日本語進駐」のエピソードは、同じ見開きに「バサル（市場）から帰るカロバタツクのおかみさん」と題されたイラストレーションが付されていることから、カロのグループについて記述したものであると推測される。

(7) 帝国日本の視覚表象に見られる女性身体の問題については伊藤るりほか編〔二〇一〇〕および北原恵編著〔二〇一三〕など、近年学際的な研究成果が発表されつつある。松下も本画集やシンガポールで発表した作品に多くの女性を登場させており、ジェンダーとコロニアリズムの観点からの考察に重要な事例を提供している。この点については稿を改めて検討したい。

(8) 一九三〇年代の少年雑誌『少年倶楽部』に見られる南方住民の「サンボ・タイプ」については、Cheng Chua [2010]を参照。

(9) ジョン・タワー〔二〇〇一・四〇五〕は英米の報道に見られる日本人の絵画イメージが徹底的に非個人化、非人間化されているのに対して、日本の漫画家が敵を表すときに、動物として描く際にもしばしばローズヴェルト、チャーチル、蒋介石の顔を描いていたことを指摘している。

(10) 訳文は浦田〔二〇〇七・二〇一〕に従った。

(11) 訳文は浦田〔二〇〇七・二〇六〕に従った。

(12) 日本占領下シンガポールを含む南方占領地における経済状況・社会状況については倉沢愛子〔二〇一二〕が幅広くこれまでの研究成果を踏まえて論じている。また、シンガポール側の資料としてLee Geok Boi [2005]、新加坡国家档案馆昭南福特车厂纪念馆展览出版工作委员会〔二〇〇六〕、シンガポール・ヘリテージ・ンサエティ編〔二〇〇七〕などが当時の状況を戦争経験者の残した資料や証言などをもとに伝えている。

(13) 例えば松岡〔二〇一二〕など。そのほか、渡辺洋介〔二〇〇七〕はインタビューなども行って日本占領下シンガポールでの教育政策の実態を明らかにしている。

文献一覧

Akashi, Yoji 1991 "Japanese Cultural Policy in Malaya and Singapore, 1942-45". In Grant K. Goodman (ed.), *Japanese Cultural Policies in Southeast Asia during World War 2*, pp. 117-172. Basingstoke: Macmillan.

Akashi, Yoji 2008 "Colonel Watanabe Watarru: The Architect of the Malayan Military Administration, December 1941-March 1943". In Yoji Akashi and Mako Yoshimura (eds.), *New Perspectives on the Japanese Occupation in Malaya and Singapore, 1941-1945*, pp. 33-64. Singapore: NUS Press.

Cheng Chua, Karl Ian Uy 2005 "The Stories They Tell: Komiks during the Japanese Occupation, 1942-1944". *Philippine Studies* 53 (1), pp. 59-90.

Cheng Chua, Karl Ian Uy 2010 *Gaijin: Cultural Representations through Manga, 1930's - 1950's*. Ph. D. dissertation, Graduate School of Social Sciences, Hitotsubashi University.

Lee, Geok Boi 2005 *The Syonan Years: Singapore under Japanese Rule 1942-1945*. Singapore: National Archives of Singapore.

Lim, Cheng Tju 2009 "“Forgotten Legacies”: The Case of Abdullah Ariff's Pro-Japanese Cartoons during the Japanese Occupation of Penang". In Richard Scully and Marian Quartly (eds.), *Drawing the Line: Using Cartoons as Historical Evidence*. Melbourne: Monash University ePress.

新加坡国家档案馆昭南福特车厂纪念馆展览工作委员会 二〇〇六《昭南时代—新加坡沦陷三年零八个月展览图集》
新加坡：新加坡国家档案馆。

明石陽至 一九九七「日本軍政下のマラヤ・シンガポールにおける文教政策——一九四一—一九四五年」倉沢愛子編『東南アジア史の中の日本占領』所収、二九三—三二九頁、早稲田大学出版部。

明石陽至編 一九九八『南方軍政関係史料三 渡邊渡少将軍政(マラヤ・シンガポール)関係史・資料第五卷』龍溪書舎。
明石陽至二〇〇一「渡邊軍政——その哲理と展開(一九四一年—二月—四三年三月)」明石陽至編『日本占領下の英領マラヤ・シンガポール』所収、二五—八九頁、岩波書店。
伊藤るり、坂元ひろ子、タニ・E・バーロウ編二〇一〇『モダンガールと植民地的近代：東アジアにおける帝国・資本・

ジェンダー』岩波書店。

井伏鱒二一九四三a—一九九七a『マライ・昭南の出版物』、『朝日新聞(東京本社)』一九四三年五月八—九日(『井伏鱒二全集』第十卷、筑摩書房所収)。

井伏鱒二一九四三b—一九九七b『南航大概記』『花の町』

文藝春秋社(『井伏鱒二全集』第十卷、筑摩書房所収)。

井伏鱒二一九七四「跋」寺崎浩『戦争の横顔——陸軍報道班員記』所収、七—一頁、太平出版社。

浦田義和二〇〇七『占領と文学』法政大学出版局。

小野耕世二〇〇三『小野佐世男ジャワ従軍画譜』をめぐって』『アジア遊学』五四、一〇九—一八頁。

小野耕世二〇〇四「小野佐世男はインドネシアで何をしていたのか」『マンガ研究』六、八六—九八頁。

小野耕世二〇〇五「小野佐世男はインドネシアでなにをしていたのか」『インテリジェンス』六、六七—七八頁。

小野耕世二〇一〇「小野佐世男とインドネシアの画家たち——父の仕事を追う(四)」『図書』七三四、二六—三〇頁。

小野耕世・木村一信編(軍政監部宣伝部監修)『ジャワ新聞社発行』二〇一〇『南方軍政関係史料一三 小野佐世男ジャワ従軍画譜』龍溪書舎。

神谷忠孝一九九六「序論」神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家—戦争と文学—』所収、一—一四頁、世界思想社。

神谷忠孝・木村一信編 一九九六『南方徴用作家—戦争と文学—』世界思想社。

神谷忠孝・木村一信編二〇〇七『(外地)日本語文学論』世界思想社。

河西晃佑二〇一一『帝国日本の拡張と崩壊——大東亜共栄

「昭南島」における漫画家松下紀久雄（松岡）

園」への歴史的展開」法政大学出版局。

川村湊一九九三『大衆オリエンタリズムとアジア認識』『岩波講座 近代日本と植民地』文化のなかの植民地』一〇七・一三六頁、岩波書店。

北原恵編著二〇一三『アジアの女性身体はいかに描かれたか』視覚表象と戦争の記憶』青弓社。

木村一信二〇〇四『昭和作家の〈南洋行〉』世界思想社。

倉沢愛子二〇一二『資源の戦争』大東亜共栄圏』の人流・物流』岩波書店。

櫻本富雄一九九三『文化人たちの大東亜戦争』P.A.部隊が行く』青木書店。

櫻本富雄一九九七『戦時下の古本探訪』こんな本があった』インパクト出版会。

櫻本富雄二〇〇〇『戦争とマンガ』創土社。

里見脩二〇〇〇『ニュース・エージェンシー』中央公論新社。シンガポール・ヘリテージ・ソサエティ編、リー・ギョク・

ポイ著（越田稜監訳）二〇〇七『日本のシンガポール占領』証言Ⅱ「昭南島」の三年半』凱風社。

ダワー、ジョン（猿谷要監訳、斎藤元一訳）二〇〇一『容赦なき戦争』太平洋戦争における人種差別』平凡社。

ドムナック、ジャンマリ（小出峻訳）一九五七『政治宣伝』白水社。

中島健蔵一九七七『回想の文学』雨過天晴の巻』平凡社。中野聡二〇一二『東南アジア占領と日本人』帝国・日本の

解体』岩波書店。

西原大輔二〇〇二『日本人のシンガポール体験（二）』小津安二郎監督の昭南島映画三昧』『シンガポール』二〇〇二

（一）、二三・二五頁。

弘末雅士二〇〇八『パタック』桃木至朗ほか編『新版』東南アジアを知る事典』所収、三三四・三三五頁、平凡社。プラトカニス、アンソニー&エリオット・アロンソン（社会行動研究会訳）一九九八『プロバガンダ』広告・政治宣伝のからくりを見抜く』誠信書房。

松岡昌和二〇一二『昭南島』における「文化人」——こども向け新聞からの考察』『植民地教育史研究年報』

一四、一四一・一五九頁。

松岡昌和二〇一三『日本占領下シンガポールにおけるこども向けプロバガンダの思想的起源——童心主義と南方向け

日本語教育の連続性にかんする仮説的考察』、『日本植民地・占領地教科書と「新教育」に関する総合的研究』学

校教育と社会教育から（平成二二・二四年度科学研究費補助金基盤研究（B）課題番号二二三三〇二〇七報告書）

二九七・三〇九頁。

松下紀久雄一九四四『南を見てくれ』新紀元社。松下紀久雄一九八九『墨に生きるむかし絵ばなし』日貿出版社。

松永典子二〇〇二『日本軍政下マラヤにおける日本語教育』風間書房。

渡辺洋介二〇〇七『シンガポールにおける皇民化教育の実相——日本語学校と華語学校の比較を中心に』池田浩士編

『大東亜共栄圏の文化建設』所収、七五・一三五頁、人文書院。

本稿はシンガポール国立大学アジア研究所主催 Tth

Singapore Graduate Forum on Southeast Asia Studies
(二〇二二年七月一八日)における口頭発表の内容に基づく。

本稿は日本学術振興会科学研究費(特別研究員奨励費 課題番号二五・四七九三)の助成による成果である。

(日本学術振興会特別研究員P D、東京藝術大学大学院音楽研究科)

Cartoonist Matsushita Kikuo in “Syonan-to”: A Japanese Intellectual’s Perception of Japanese-Occupied Southeast Asia

MATSUOKA, Masakazu

「昭南島」における漫画家松下紀久雄（松岡）

From February 1942 to September 1945, Singapore was under the rule of Japanese Army. Japanese intellectuals requisitioned by the Army were put in charge of conducting the propaganda and cultural policies in Syonan-to, which is the war-time name of Japanese-occupied Singapore. This paper examines some aspects of Japanese cultural policies in Syonan-to with a focus on a Japanese cartoonist Matsushita Kikuo. In particular, it aims to highlight the natures and the boundaries of the cultural policies in Syonan-to through exploring Matsushita’s works.

After the breakout of the Pacific War, Matsushita was sent to Singapore to work for the fine art section of the Propaganda Department and later moved to Borneo. In Singapore, he drew cartoons and illustrations for a Chinese newspaper the *Syonan Jit Poh* (Zhaonan Ribao) and an English newspaper the *Syonan Times*. In 1944 he published a book of drawings, *Minami wo Mitekure* (Look at South), which he created based on his experiences in Southeast Asia.

Matsushita’s *Minami wo Mitekure* contains a series of episodes from his own experiences in Syonan-to, Sumatra and Borneo with many illustrations. Although he called this book of drawings “political cartoons”, its focus is on the unique exotic scenes he got interested in rather than political and military issues. Similarly, the central subject matter of his cartoons and illustrations in the two newspapers published in Syonan-to was not the Japanese people who were expected to lead the Empire but the local people. Even in the illustration of the enemies, he did not draw the Japanese soldiers who beat them. Rather, the cultures and the products he encountered in Southeast Asia were his major concerns in his works.

Most of Matsushita’s works are, regardless of the cliché of war propaganda in his statement and in his *Minami wo Mitekure*, non-political. The propaganda policies in Syonan-to lacked consistent principles, as it primarily depended on the personality and ability of each intellectual. Thus, Matsushita’s war-time works reflect his way of conveying a Japanese intellectual’s perception of Southeast Asia.